

満月の翌日、日が沈む頃になって紅魔館当主レミリア・スカーレットは起き出して来た。彼女にとっての『朝食』を終え、執務室に入った頃には空に月が白々と輝いている。まだ目が覚めないのか、どことなく眠たげな顔つきだった。

そんなレミリアの傍らには、紅美鈴の姿があった。彼女は当主警護隊長であり、幼い主に代わって実質的に執務を遂行する側近でもある。紅魔館において何か取り決めなどを行うときは、主に適切な助言を与えることが求められるし、実際にその要求に応えてきた。美鈴こそが紅魔館のナンバー2と言ってよいだろう。

今夜は紅魔館始まって以来の重要案件を話し合うことになっていた。レミリアが執務机に肘を着いて気だるそうに問いかける。

「……それで、パチェは何と言っている？」

「技術的には問題ないそうです。手持ちの魔導書・魔道具だけで『移転』は可能とのことですよ」

「そう。移転先の状況についてわかっていることは？」

「調査の結果、お嬢様のご期待に添えるものとのこと。決して広大ではありませんが、相当数の人外が確認できたそうです」

「なるほど……まさに楽園ね、その『幻想郷』とやらは」

レミリアは満足げに頷く。この幼い吸血鬼は新天地への館ごと移住するという壮大な計画を企てていた。新世紀を間近に控え、人間はこの星全てを覆い尽くすような早さで勢力を拡大している。そんな世界に自分たちのような存在の居場所など無い、というのが彼女の考えだった。美鈴は念を押すように問う。

「では、よろしいのですね？」

「何度も同じ事を言わせるな。化物はいずれ人間に滅ぼされる、そういうものなんだよ。だがその幻想郷なら我々を受け入れる余地もあるだろう。……それに、各地で『同胞』が狩られているという噂も気になる」

「その件に関して確証はありませんが、英国の秘密情報部が関与しているとの報告もあります」

「いずれにせよ、選択の余地は無いさ。要員の確保もままならないのだろう？」

美鈴は黙って頷く。レミリアの言う『要員』とは妖精のことで、紅魔館では彼女らにメイドや警備を担当させている。しかし近年、妖精は激減しつつあり定員も満たせていないのが現状だった。そのため館内は一部を除いて荒れ放題である。

「では……」

「予定通り決行する。パチェに準備を」

主がそこまで言いかけた時である。ロックも無しに執務室のドアが開かれ、何かが中に放り込まれた。鈍い音を立てて絨毯の上に転がったそれは、警護隊に所属する妖精だった。喉をかき切られ、大きな傷口から血を溢れさせて死んでいる。

美鈴が息を呑んだのも束の間、開いたドアから一人の少女が入ってきた。髪は銀色で黒の戦闘服姿、その右手には血塗れのナイフが握られている。底冷えのするような青い瞳は何を映しているのか判然としなかった。

「警護隊！」

緊急事態だと悟り、美鈴は隣室に向かって叫んだ。すぐに横手のドアが開き、二名の警護隊妖精が駆け込んでくる。慌てふためく周囲を尻目に、レミリアは肘を着いた姿勢を崩さず、退屈そうに事態を傍観していた。できればおとなしく避難して欲しいのだが、と胸中でぼやきつつ美鈴は指示を飛ばす。

「侵入者だ、拘束しろ！」

命令と同時に二人の妖精は警棒型スタンガンを抜き、得体の知れない娘へ向かっていく。これに対する少女の反応に、美鈴は目を奪われた。

少女は床を蹴って駆け出すと、銀のナイフを一閃させた。一方の妖精が悲鳴を上げ、首筋を手で押さえる。指の隙間からは血が噴き出していた。

倒れゆく同僚の姿に激昂し、もう一人が警棒を振り下ろす。少女は妖精の肘辺りを腕で跳ね上げ、その胸を水平に突く。根元まで食い込んだナイフは心臓に達しただろう。妖精は痙攣し、その場に崩れ落ちた。

美鈴が少女を目で追えたのはそこまでだった。いつの間にかその姿が掻き消え、警護隊妖精二名の死体だけが転がっている。

「消えた……！？」

思わず驚愕の声を上げる。直後、鋭い痛みが美鈴を襲った。下を向くと、胸や腹に何本もの投げナイフが突き刺さっている。刃には特殊な処理が施してあるらしく、妖怪である美鈴に焼け付くような苦痛を与えた。

倒れる直前、どうにか主の方へ視線を這わせた。レミリアの目の前にあの少女が立っている。幼い吸血鬼の胸には銀のナイフが深々と沈められていた。主は意外そうに自らに突き刺さる刃を見下ろしていたが、やがて口の端を歪めて笑う。いつも退屈だと言っていた彼女は今の状況を楽しんでいるようだった。

レミリアが右腕を振ると、少女はナイフを抜いて飛び退いた。そのすぐ目の前を長く鋭い爪がかすめていく。そこから先は美鈴には着いていけない世界だった。少女はあのレミリアを相手に、ほぼ互角に立ち回っている。怪力で繰り出される攻撃をかいくぐり、格闘用ナイフで、あるいは投げナイフで吸血鬼の身体に傷を刻み付けていった。

なんだあれは、と横たわりながら美鈴は思った。あの娘は本当に人間なのか。警護隊妖精を始末した時点で、尋常でない相手だとは見抜いていた。妖精の中でも素質のある者を選抜し、美鈴自ら訓練したのが警護隊である。それを少女は一瞬で二人も殺害した。しかし信じがたいのはその後の動きだった。美鈴に避ける暇も与えず投げナイフを食らわせ、その上でレミリアの目の前に立って一突きしている。見間違いで無いならよほどの高速で動いたとしか思えなかった。

「神速……」

美鈴は思わず呟いた。こうして見ている最中も、少女はいつの間にレミリアの背後に回りこんで背中にナイフを突き立てている。

「やるじゃないか。いいぞ人間、面白いぞ！」

驚愕するばかりの美鈴とは対照的に、彼女の主は心底楽しそうだった。すでに体中が傷だらけで血塗れになっているというのに、顔つきは愉悅に染まりきっている。

いつまで経っても倒れる気配を見せぬ相手に、少女は焦りを感じ始めたようだった。首を狙った一撃がやや大振りになる。レミリアはそれを見逃さなかった。左腕で攻撃を跳ね除け、右手で少女の首を掴む。その体が軽々と持ち上げられ、つま先が床から離れた。

終わったか、と美鈴は安堵のため息をついた。攻撃を弾かれた時にやられたようで、少女の右手首はありえない方向に曲がっている。その手を離れたナイフが床に突き刺さっていた。あとは首をへし折られて終わりだろう。

苦しげに顔を歪めながらも、少女はなおも抵抗した。左手で腰のナイフを抜き、レミリアの前腕部に振り下ろす。刀身はパターを突き刺したようにするりと食い込んだ。わずかに顔をしかめながらも、レミリアはまた笑う。

右腕を振り回し、少女を執務机にたたき付ける。机は派手な音を立てて真っ二つになり、少女はその残骸に埋もれた。

レミリアは突き刺さったナイフを抜いて投げ捨て、少女の前に立つ。すでに動く力も残っていないようで、少女は自らを見下ろす吸血鬼を見つめ返していた。そしてかすれた声で呟く。

「……殺せ」

「自殺志願者か？ だが各地で同胞を殺したのはお前だろう？」

「……」

「私はお前を殺せる。そうしようとするだけで、いとも簡単に、つまりお前の命は私の手の内にあるわけだ」

美鈴は会話を聞いているうちに嫌な予感がしてきた。また主が妙な気まぐれを起こしているのではないか。そしてそれは的中した。レミリアは窓の外で煌々と輝く月を見上げ、嬉しそうに笑う。

「十六夜の下で見事に血の花を咲かせた娘、お前は私のものだ」

「……」

「名を与えてやる。十六夜咲夜 今日からそう名乗るといい」

「十六夜……咲夜……」

それまで能面のような少女の表情が、微かに動いた。虚ろな瞳に幾ばくかの光が戻る。何も寄る辺が無かったような印象が薄らいだ。美鈴はそんなふうにした。

レミリアがこちらを見た。あの娘に対してはどこか優しげですらあったのに、美鈴を見下ろす瞳は酷く冷たい。

「それで、お前はいつまで無様に寝ているつもりだ？」

「え……あ、あの……」

刺さったままの投げナイフで体が悲鳴を上げるが、それでもどうにか力をこめて起き上がった。そんな美鈴に対するレミリアの態度は変わらない。怒っているというよりも、関心を失ったような顔つきだった。

「部屋を片付けさせる。今すぐにだ」

「片付け、ですか、……？」

「死体、机、その他散乱した物、お前は私を怒らせて楽しいのか？」

「いいえっ！ ただちに！」

美鈴は慌てて部屋を飛び出し、妖精メイドたちへの指示を出す。そんな中で彼女は確信する。警護隊長としての役割を満足に果たせなかった自分は、主の不興を買ってしまったのだ。

それから程なくして、紅魔館は幻想郷に移転した。外の世界では山奥に建っていたのだが、今は湖に浮かぶ孤島の館である。

新天地でレミリアが真っ先に着手したのが、要員の補充だった。荒廃した館を修復し、維持するためには頭数がいる。幻想郷には妖精がいくらでもいたので、数はすぐに揃った。だが質の低い者が多く、組織に組み込む上では問題だった。それに食料や資材など物資を調達する必要もある。

その際に頭角を現したのが十六夜咲夜だった。扱いは一介のメイドに過ぎないが、レミリアに大きな裁量を与えられ、その能力を発揮したのである。

日常作業を合理化し、基本的な訓練を積んだだけの妖精メイドでもどうにか維持できるような状態を作り上げた。さらには警備体制の不備を指摘し、レミリアの許可を得て警護

隊を再編した。彼女は特にその方面で力を発揮し、隊の練度向上に貢献したのである。さらには情報を集め人里と交渉し、食料や物資の確保に成功した。その上で上白沢慧音に相談して『吸血鬼異変』以来の契約内容を確認し、紅魔館に便宜を図ってもらえるようにしている。

レミリアを殺しに来た少女は、その相手のために精力的に働いた。あの夜、彼女の中で何が吹っ切れたのかもしれない。そんな咲夜をレミリアは高く買っているようだった。

咲夜が幻想郷における紅魔館の新体制構築に貢献している姿を、美鈴は指をくわえて見ていることしかできなかった。今までは自分が担当していたあらゆる事が持っていかれてしまったし、レミリアも何かあればまず咲夜に相談しているようだった。

どうすればいいんだ、と美鈴は胸中で呟いた。自分は冷遇され、立場が危うくなっている。彼女がこうして警護隊待機室の椅子を尻で暖めている間も、咲夜は主のため献身的に働いているのだ。何とかしたいのに何も出来ない、そんな焦りがこみ上げてくる。

「……見回りでもするか」

ポツリと呟いて席を立つ。本来なら隊長がやるような事ではないのだが、何もせずにいるのが怖かったのである。

廊下を歩いていると妖精メイドなどとすれ違ったりするが、皆どこかよそよそしい。以前なら笑顔で挨拶されていたというのに。そして警護隊の者は困惑気味ながらも、一応敬礼してそそくさと通り過ぎていく。レミリアの指示で事実上の指揮権が咲夜に移ったため、隊員としてはどう接したらよいのか戸惑っているのだろう。

しばらく行くと人だかりもとい、妖精だかりができていた。その中心には咲夜の姿がある。美鈴はとっさに柱の影に身を潜めた。どうして自分がゴソゴソしなければいけないのだ、と思いながらも姿を見せるのがなんとなくはばかられる。

遠いのははっきり聞き取れないが、妖精たちは質問や相談事などを行っているらしい。咲夜は的確に対処しているようだった。仕事に関わることでだけでなく、ただの雑談も混じっているようで、妖精たちの笑い声が聞こえてきたりもした。

「なんだこれは……」

美鈴は思わず口に出して齒軋りした。以前なら、あそこは自分の居場所だったのだ。それが今ではすっかり咲夜が頼られている。尊敬と憧れの対象は今や自分ではなく、あの新参者の十六夜咲夜だった。あの夜、彼女が現れたことで全てが一変してしまった。

また妖精たちが笑っていた。それがまるで自分に対する嘲笑のように聞こえる。居た堪れなくなり、美鈴は足早にその場を立ち去った。

「ご苦労だったわね、美鈴、今日付けで警護隊長の任を解く」

「は……？」

久々にレミリアから出頭を命じられ何事かと思えば、いきなりこの一言だった。呆然とする美鈴のことなど意に介さぬように、傍らに控える咲夜を手で指し示した。

「新たに『メイド長』という役職を設けることにした。それに咲夜を就かせる」

「メイド長……？」

「私の直属として、館内の全てを取り仕切る。その中には当然警備も含まれる。だからお前が隊長職を務める必要は無くなったわけだ」

美鈴は信じがたい思いで主の言葉を聞いていた。要するに咲夜が紅魔館のナンバー2となるのだ。何十年も仕えてきたこの自分が、やって来てわずか数ヶ月の小娘に取って代わられる。美鈴には耐え難いことだった。

「そ、それで、私はどうなるんです？」

「警護部門の一隊員として、咲夜の指揮下に入れ」

「冗談じゃありませんよ！ どうして私がこんな……こんな人間なんかに従わなければいけないんですか！？」

とうとうこらえきれなくなり、美鈴は激発した。そしてありったけの憎悪を込めて咲夜を睨み付けるが、相手は顔色一つ変えない。レミリアが面倒くさそうに、そして冷やかに言った。

「ふうん……『こんな人間』に敗れ、無様に這いつくばっていたのはどこの誰だったかな？」

「そ、それは……あの時は、その、不意を突かれただけで……」

「無様な言い訳だな、敵が待っていてくれるとも思ったか？ ……それで、お前は欲しいんだ」

「ともかく納得いきません、こんな仕打ち……！！」

レミリアの指摘がごとごとく的を射たものだったので、美鈴には感情的に喚くことしかできなかった。気まぐれな主は鬱陶しそうに天井を仰いでいたが、やがて吐き捨てるように言う。

「ならもう一度だけチャンスをやろ。咲夜と決闘をしろ。勝てばお前の言い分を聞いてやってもいい」

紅魔館の中庭が決闘の場となった。月明かりの下、レミリアやパチュリー、そして大勢の妖精メイドたちがこの勝負を見守っている。皆の前で打ち負かしてやればまた以前のよ



「悪いな、お邪魔していくぜ！」

そう言って白黒の魔法使いが敷地内へ侵入していく。美鈴にはそれを見送ることしかできなかった。これで何度目だろうか。すでに数えることなどやめてしまったが、三桁に達したところまでは覚えている。

「まったく、これで失態は何度目なのかしら？」

「あ、咲夜さん……」

叱責の声に、美鈴は気の抜けた声で答える。門前にはいつの間にか、日傘を差したレミアと咲夜の姿があった。これからまた神社へ行くのだろう。美鈴はへらへら笑って答えた。

「あはは、ごめんなさい、またやられちゃいました……」

「あのね、少しは反省を」

「咲夜、そんな事はどうでもいいから早く行くわよ」

そう言ってレミアが咲夜を促す。美鈴のことはわずかに横目で見ただけだった。すでにこの主は彼女に対して興味など持っていないのだろう。レミアの言葉なので、咲夜は肩をすくめながらも従った。

「ではそうしましょうか。……美鈴、もっとしっかりやりなさいよ」

「は、はい、ではお二人とも、行ってらっしゃいませ」

美鈴は取り繕うような笑みを浮かべ、見送りの挨拶をした。咲夜はまだ何か言いたそうだったが、レミアに袖を引っ張られたので歩き始める。

遠ざかっていく二人の背を見ながら、美鈴は齒軋りしていた。湧き上がる屈辱を必死でこらえる。まだだ、今はまだ雌伏の時だ。その思いだけを胸に、今はひたすら耐える。

時間が経てば、人間である咲夜はいずれ死ぬ。そこまで待たなくとも、老いて力が衰えたならば取って代わることもできるだろう。だが今はその時ではない。自らに言い聞かせると、普段の柔和な笑顔でレミアと咲夜の姿を見送った。

- 
- 美鈴にも子分的な存在がいればな -- 名無しさん (2009-06-01 18:18:56)
  - 咲夜と妖精の関係は上司部下だが  
美鈴と妖精の関係はそれにさらに友情という関係があるように思えてしょうがない -- 名無しさん (2009-06-01 18:54:23)
  - 美鈴の復讐劇キボン！ -- 名無しさん (2009-06-02 00:43:25)
  - 咲夜やレミアが酷い目に合っても何とも思わないが  
美鈴が酷い目に合うのは心が痛むな... -- 名無しさん (2009-06-02 09:35:44)
  - >>3  
早苗「どこの馬の骨とも知らぬ人間に地位を奪われ、あまつさえ長年  
遭えた主の信頼までも失った。今の自分に存在意義はあるのだろうか？  
あなた程の妖怪が何を悩む必要がありますか。どうせ人間はすぐに死ぬ。  
その時お嬢様を守るのは美鈴さんだけです！さあ、祈るのです  
守矢の神に信仰を捧げるだけであなたはどこまでも強くなれるのです！  
奇跡の力を見せてあげましょう！」

この作品を読んで美鈴の弱みに付け込み信仰を増大していく  
早苗さんを幻視した。

美鈴「あなたは -- 名無しさん (2009-06-02 16:51:55)

- 衰えるまで待つ、とか言っちゃってるからもうダメなんだろうな  
もう二度とおぜうさまには相手にされないと予想 -- 名無しさん (2009-06-02 19:42:08)
- 美鈴が非情になるのは土台無理な相談か -- 名無しさん (2009-06-02 22:56:40)
- >>5  
それなんて八坂学会 -- 名無しさん (2009-06-03 00:02:29)
- 魔術的なものが一切使用できなくなる状況になれば  
美鈴が最強生物になるよ -- 名無しさん (2009-06-03 12:33:57)
- スペルカードルール自体が武道家に超不利だからな  
でもこの話の中だと接近格闘戦で負けてる・・・ -- (2009-06-03 20:15:52)
- まっ元々超接近戦でもレミアや萃香はともかく  
咲夜や霊夢にさえ勝てるか怪しいが... -- 名無しさん (2009-06-03 20:44:11)
- 「怪しい」んじゃないくて「分からない」だろ  
というか霊夢には夢想天生があるからレミアよりは強いだろ -- 名無しさん (2009-06-04 23:37:12)
- 英国の秘密機関でHELLSIGの事wたしかにまずい -- 名無しさん (2010-03-16 22:09:27)

美鈴のU-1物が多すぎて辟易してたから良い物を見せて貰った -- 名無しさん (2010-03-16 23:01:27)

- 確かに負け癖付いた奴の考え方だよな、老いを待つのはこの様子じゃ自身の鍛錬怠っていて老獺さを身につけた老咲夜にも負けかねん -- 名無しさん (2010-06-28 22:27:49)
- 伏龍かあ -- 名無しさん (2010-07-03 21:06:54)
- 「雌伏の時」が「雌犬の時」に見えてビックリした -- 名無しさん (2010-09-07 14:39:20)
- 俺がいる -- 名無しさん (2010-09-09 19:38:17)

名前:

コメント: